

60 号記念誌発行に当たって



社長 今井 雅也

FB テクニカルニュースは 1982 年に第 1 号を発行して以来、今回おかげさまで第 60 号を発行する運びとなりました。この間お客様の皆様には多少なりとも弊社の新商品や技術レベルの一端あるいは開発の状況をご理解頂くことでお役に立てたのではないかと自負を致しておりますとともにこれに関連していろいろとご指導、ご助言を頂きましたことに心より感謝をいたします。

今、日本の電池業界は大きな再編の動きの中にあります。私はいつも申している通り、弊社が品質とコストと開発力において他に負けない力を発揮できれば単独でも十分に生き残れますし、そのことに力が集中できれば決して大きいことが良いことではなくすることも可能だと考えています。

他に負けない、ということは他社と差異のある高い品質、低いコストを実現できるモノ造りの力を持つことと、今までの商品と差異のある新しい商品を継続的に出していく力です。社内のすべての部門がそれぞれの役割の中で Number One、Only One、First One を目指していかなければなりません。開発に携わっている部門においてはこれまで以上にここに力点をおいて、何が何でも差異性のあるものを生み出すように努力していかなければならないと考えています。

社内では全体の売上の中で新製品の売上がどのような割合になってきたかを知るために新商品化率をひとつの指標としております。その中で、本当に今まで例のない“市場創外型”に分類される新商品の売上比率はあまり伸びていない、と報告されています。しかし、この分析を始めた当初から比べる

と今までのやや甘かった分類と違って最近分類されている“市場創外型”の商品は本当に今まで市場に出ていないもので、名実ともに“市場創外型”と呼んでふさわしいものになってきたように感じています。ただ、一方で、せっかく“市場創外型”の商品と思って市場に出しても市場から得られる収益という点で見ると決して高くない、既存商品とあまり変わらない、とも分析されています。このことが意味していることは、私たちが社内で「これは市場創出型新商品だ」、「Only One だ」と自賛しても市場ではまだまだそれだけの評価をして頂けていない、と考えるべきでしょう。もちろんまだ営業努力が足りなくて市場に十分に浸透していないこともあるでしょうが、本当に市場が反応する商品であれば必ず高い収益や高いマーケットシェアという形でのアワードが頂けるようになると考えています。どんなに優れたさなぎができて本本当に美しい蝶に変身させるためにはもう一段の厳しい努力と工夫が必要です。また、新商品の開発は“市場創外型”に限られることなく、“改良型”や“他社追随型”の新製品もあるでしょう。そのような新商品の場合にも改良型の場合は当然のことながら、他社追随型の場合であってもどこかひとつ弊社独自の、あるいは Number One のポイントを加えられるようにしなければなりません。前にも触れましたようにこれからは何らかの明確な差異がなければ結局は安値競争に巻き込まれ、最後には市場から脱落してしまうと覚悟しなければならないのです。

さて、私たちの周辺には課題とすべきこと、やってみみたいことがたくさんあります。しかし、限られ

た資源の中で、しかも高い成果を期待するためには弊社の最も得意とする分野、これまでの事業や研究開発の中でもっとも知見の集積が進んでいる分野、いわゆるコア・コンピタンスに資源を集中することが必要です。

弊社においてもっとも知見が集中しているのは言うまでもないことです鉛電池・アルカリ電池・Liイオン電池など二次電池の製造に関する分野です。しかもこの周辺にはまだ多くの開発課題があります。これに対する取り組みの成果の一端は後の報文にも出て参りますが、特に私は素材技術に注目しています。最近では新たな素材革命の時代を迎えたといわれ、素材の開発に関心が集まり、新たな素材もいろいろと生まれています。素材において優位な成果が得られれば最終製品で決定的な差異を生み出すことができます。例えば鉛電池の分野で弊社が開発したC21あるいはC21S合金は大変優れた素材で、これからいろいろの形で花が開いていくことを期待していますが、周辺技術が今のままの段階で止まってしまうと、せっきくのC21が宝の持ち腐れになってしまうことの懸念もあります。C21を活かすには極板だけでなく活物質やセパレーターや電解液さらには電槽にいたるまでのすべての素材でC21に匹敵する新たな優位性のある素材を開発することがどうしても必要だと思います。そうした新たな素材が組み合わされて初めて強い競争力を持った電池が生まれ、“さなぎ”から美しい“蝶”への変身が実現できるのだと思います。

もうひとつ確認しておくべきことはこのように弊社が電池の製造に関して高い知見の蓄積があるということは電池の内部状態、すなわちどのような形で活性化し、どのような形で劣化が進行するのかなどについて多くの知見を持っていること、あるいは持ちうることを意味していることです。このことは極めて重要なコア・コンピタンスであり、この知見をもっともっと活用すべきです。

二つのことが考えられます。一つはそうした内部状態を外部から見えるようにして電池を状態監視する、モニタリングするということです。これについてはすでにFGUARD¹⁾やBCW²⁾として商品化が進

んでいます。内部状態の把握の仕方にしても情報の外部への取り出し方に関してもまだまだせっきくの知見を十分に生かしたものは言いがたいように思います。

もう一つはこの内部状態に着目して最適な内部状態を維持しながら最大のパフォーマンスを実現する充放電のための機器の開発であり、充放電システムのマネジメント技術です。電源事業や航空機用のチャージャビジネスはこの点に基盤をおいているのですが、ここにおいても弊社の持つ知見を活かしたものの、とはまだ言い難いところがあります。充放電をきちっとマネジメントできるようになれば大変に広い応用範囲を持った技術に展開できるようになるに違いありません。

以上の通り課題は山積ではありますが、これらの課題に応じてFBテクニカルニュースが今後一層充実したものとなり情報量が増大することが弊社の業績の拡大に向けてのもっとも近道であることを認識して努力をして参る所存でございます。関係の皆様がますますのご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

- 1) 田口 仁、FBテクニカルニュース、No.59、82 (2003)
- 2) 長嶋 茂、高橋 清、FBテクニカルニュース、No.59、79 (2003)